中央大学社会科学研究所年報　第 21 号（2016）

アントニオ・ネグリのマルチチュード

遠　藤　　孝

Multitude in Antonio Negri

ENDO Takashi

The concept of “multitude” occupies an important position in Antonio Negri’s theory. This concept is hard to understanding. Negri discusses that multitude is related to post-Fordism, real subsumption of society under capital, immaterial labor, bio-politics and bio-power. In his discusses bio-politics connects real subsumption and immaterial labor, moreover, it makes multitude as political subjects. The multitude is not classified in the existing social category. Pursuing his writings, for instance *Empire, Multitude*, and *Commonwealth*, this article aims to clear the concept of “multitude”.

キーワード：実質的包摂，労働者の階級的構成，ポスト・フォーティズム，非物質的労働，生政治，生権力.

はじめに

2000年代にいわゆる〈帝国〉三部作[1)]を刊行することで，アントニオ・ネグリは全世界的な反響を呼び起こした．この三部作では多くの概念が論じられた．その一つが「マルチチュード（multitude）」である．このマルチチュードをめぐっては，そのわかりにくさが指摘されてきた[2)]．具体的に誰あるいはどの集団を指すのか．この点が不鮮明であり，ある意味，ネグリの議論全般に対するわかりにくさにつながっているように思われる．

中村勝巳は，マルチチュードとは近代政治思想史においては「脇役」でしかなかったと指摘している．中村の見解では，近代政治思想の主流である社会契約論ではマルチチュードは等閑視されてきたが，そのマルチチュードに着目したことがネグリの「慧眼」であるとされる[3)]．すなわち，マルチチュードとは概念的に練り上げられていない，このことに着手した論者はネグリが初ということになる．それがわかりにくさの原因の一つであろう．

わかりにくさの原因はもう一つある．それは「具体性なイメージのなさ」である．

市田良彦は，マルチチュードとは「具体性を蹴飛ばす力においてマルチチュード的だと考え

るべき」であると指摘した[4]．彼によれば，既存の社会的カテゴリーに収まらない存在がマルチチュードであるということになる．なぜマルチチュードは既存の社会的カテゴリーに収まらないのか．一つの仮説として，社会関係が変化していることが考えられる．社会関係の変化に伴い，または変化を牽引する主体として，マルチチュードをとらえることができないだろうか．この変化した社会関係を，ネグリは「ポスト・フォーティズム」と呼ぶ．

本稿においては，このポスト・フォーティズムにかんする議論を検証するなかで，「主体としてのマルチチュード」を明らかにしていきたい．

1　ポスト・フォーティズムとは何か――資本，労働，社会，国家

ネグリと同じくイタリアのラディカル派であるマウリオ・ラッツァラートによれば[5]，1970年代が開始する時点で「フォーティズム労働者の敗北と生産の内部における（ますます知的になる）生きた労働の中心性についての認識」が形成されたとされる．これらのうえに「さまざまに異なったポスト･フォーティズムのモデル」が構築されたと分析する．これは大工場を「再構築すること（restricting）」であり，そして「再構築された（restructured）」大企業では，「労働者の仕事（work）は，さまざまなレベルにおいて，異なった選択肢のなかから選びとる能力（ability）と意志決定にかかわる責任性の度合いをますます含むようになる」．つまり「労働力の構成やマネジメントそして規制――つまり生産の組織化――だけではなく，より深く，社会の内部での知性の役割や機能およびそれらの諸活動に根本的な変化を生じさせた」ことになる[6]．

ネグリもまた基本的にはこうした見解を有する．本章では，ネグリのポスト・フォーティズムについての議論を明らかにしていく．

1.1　ネグリにおける〈実質的包摂〉の概念

ネグリの考えでは，まず資本が自らを工場に集中した職人的労働者の時代があり，次に工場が社会の中心になった大衆的労働者の時代が来る．この大衆的労働者の時代は1968年ごろ終焉を迎える．そのあとの社会化された労働者の時代では，工場は社会の内外に拡散する．労働は脱領域化され，いわば壁のない工場に広がり分散される．仕事（生産），教育および訓練（再生産），そして余暇（消費），こうしたことのすべては，資本の活動の徐々に統合される循環のポイントとなる．そこでは社会全体が利潤の配列に位置づけられるのである[7]．

こうした状況をネグリは「資本による社会の実質的包摂」と述べている．これは労働の形式的包摂からはじまる．形式的というのは，歴史的には労働力が先行し，そのあとで資本が自らの内部に労働力を取り込むという過程からそのように呼ばれる．これに対して労働の実質的包摂とは，「労働過程そのものが資本内部で生みだされ，それゆえ労働が外的な力としてではな

く資本それ自体に固有の内的な力として包摂される」．マルクスが見ていた十九世紀では実質的包摂は大工業生産のなかでのみ見出された．ところが現代では，「生産の社会化や科学技術の革新をとおして」，つまり「継続的な技術的発展や工場の壁の外での労働諸過程の社会化をつうじて，実質的包摂の諸特性は社会の領域の大部分を呑み込むようになる．社会的工場は実質的労働とともに拡大し，社会的生産の全領域は特殊な資本主義的生産様式によって支配される」[8]．

形式的包摂の時代には「資本の外部に起源をもつ多くの生産過程を残存させていた」が，この「実質的包摂段階では，これら異質な生産過程が消滅してしまったという意味で，資本はもはや外部をもたない」のである[9]．ネグリはすでに1972-３年の時点で次のように述べていた．

> 私たちが知っていることは――そしてイタリアや発展した資本制の段階にあるあらゆる諸国における近年の労働者闘争により私たちにその証明が届いているように――ようするに私たちが知っていることは――マルクスの言い方を借りるなら――資本のもとへの労働の包摂の最終的でもっとも普遍的な段階が実現されつつあるところでは，資本は社会総体を覆うのであり，したがって資本制の支配と無縁な生産や協業の形態は，もはや存在しえないということなのです[10]．

ネグリ自身の見解では1968年が転換点であるから，かなり早い段階でこういった変化を見抜いていたことになる．

この〈実質的包摂〉は，もちろん資本制システムの再編成である．しかし実は「労働の拒否」によって強いられたものである．労働の拒否とは，先の引用でネグリが述べていたように，イタリアの急進的労働者による1960年代と70年代の闘いである．ネグリの分析によればこの拒否は，次のように三つのレベルで表明された．

① 大規模工業の規律や賃金体系に従属した労働への個人による拒否．
② テイラー主義的工場の抽象的労働と，フォーティズム的な社会関係のシステムに統制された欲求＝必要性の体制とが取り結ぶ関係に対する大衆的拒否．
③ ケイジアン国家がコード化する社会的再生産の法則の全般的拒否．

またこれらの三つの拒否にたいして，それぞれに対応する形で資本制システムが再編されたともネグリは述べている．

① 個人的な労働の拒否にたいしては，資本はオートメーションを導入した．
② アソシエーション的な労働の協働的関係を切断する集団的拒否への対応として，資本は生産的社会関係のコンピューター化を推し進めた．
③ 社会的な賃金規律の全般的拒否への応答として，資本は企業を特権化する貨幣のフロー

によって統制された消費の体制を導入した.

しかしながら，ネグリはこうした再編が「成功することはない」と断言している.「1968年以前に生産的大衆が行った拒否の激しさ，そしてこの拒否の社会的あるいは直接に政治的な舞台への登場,それらは再構築の時代に至ってもいまだ消えることがない．現代のポスト･フォーティズム的，ポスト・テーラー主義的，ポスト・ケイジアン的な産業の再構築は決して結末を見いだすことはないのだ」[11].

ネグリの認識を簡潔にまとめると，実質的包摂とは，労働の，そして労働者の高度化が資本の高度化を強制し，資本は包摂の最終的段階にまで至った状態ということになる.

1.2 労働者の階級的構成

〈労働者の階級構成〉とは通常「〈資本の有機的構成〉の高度化に対応して変化するもの」として措定されているが，先に明らかにしたように，ネグリの見解ではその逆で,「労働者の階級構成の高度化こそが，資本に技術革新や指揮命令の強化を強いてきたもの」[12] である．この概念を定義的に述べるならば「階級構成が意味しているのは，ようするに，労働者の技術的構成プラス社会的構成プラス政治的構成であり，これらすべてが弁証法的に統一されたもの」となる[13]．この労働者の階級構成の高度化について，ネグリがその過程を，フォーティズムとテイラー主義に指標にしてまとめている[14].

① プレ・フォーティズム

フォーティズムとテイラー主義が導入される以前の1848年から1914年にかけては，本源的蓄積とマニュファクチュアの時代である．この時代において労働のヘゲモニーを握ったのは,「工業生産において階層的に組織された高度な熟練労働者，つまり専門的労働者という形象」である．この専門的労働者たちの闘いの目標は「労働者自身が主導する労働や生産的協働による価値創造の力を,再領有のプロジェクトのために使用しうる武器へと変容させること」であった.「近代的労働組合の誕生と前衛としての党の形成はともに，この時期の労働者の闘争に由来し，事実上，その闘争を重層的に決定」したのである.

② フォーティズム

1917年から68年のフォーティズムとテイラー主義の配備によって，資本制のもとでの労働者の闘いは「大衆的労働者という形象」が規定するようになる．この大衆的労働者の闘いは「工場労働の拒否としてみずから行う自己価値の創造を，みずからの力をあらゆる社会的再生産に拡張することに結びつけた」のであり,「大衆的労働組合の組織化，福祉国家の構築，社会民主主義的な改良主義といった」この時期の労働者の闘いの成果は,「大衆的労働者が資本制の発展に強制した重層的決定の帰結」であった.

③ ポスト・フォーティズム

この時期，つまり今日は「社会的労働者」という形象が，労働者の闘いの局面において登場している．「社会的労働者」には「非物質的労働の多様な糸が編み込まれている」．この段階では，「社会的協働」が「生産を行う場」となり，ここで「大衆的知性と自己価値増殖化とを結びつけている」のが「構成する権力」である．「労働の構成する権力は，社会的労働者や非物質的労働を組織化するものであり，マルチチュードによって運営され，マルチチュードによって組織され，マルチチュードによって指揮される生政治的統一体としての生産的かつ政治的な権力を組織化する」ものとなる．

このように，労働者の階級構成の高度化が資本の有機的構成の高度化を強制したことで，社会，国家のあり方，そして労働自体も変化を遂げることになったのである[15]．

1.3　社会，国家のあり方

資本の〈実質的包摂〉の段階においては，資本と社会および国家との関係性も変化を被らざるをえない．先ほどでも見てきたように，資本は社会全体を覆い尽くす．ネグリは，情勢分析の前提がレーニンの時代とは異なっていることを指摘しつつ，資本と社会との関係を次のように述べる．

> 情勢は，社会にたいする資本の直接的支配関係により定義されるのであって，その支配は分析的に記述可能な一連のメカニズムをつうじて，たとえそうした記述の具体性がつねに変化に富んでいるとしても――なされているのです．したがって情勢の定義は，資本が社会編成体総体に拡大し，それゆえ――それと対抗的に一貫性をもって――階級の客観的で一定の再編成の必要性が生じ，その必要性を分析の本質的な前提条件とみなすような一関係によってなされるのです[16]．

ここまでの議論でも登場してきたが，資本は〈社会編成体〉に拡大して，もはや社会そのものになっているという認識であり，この認識が情勢を分析するうえでの本質的な前提となると見ている．ネグリはさらに，資本が全面的に支配するようになった社会と国家との関係を次のように述べる．

> レーニンにおいて権力は（中略），国家権力とみなされました．国家は，市民社会に対して，ひとつの頂点と考えられました．市民社会の上部にあり労働者階級に対抗する形で，国家というこの頂点から，指揮命令の方針が発せられます．しかしながら，こんにちの権

力のイメージは，もはや単にこのようなやり方では与えられません．こんにち，経済的計画国家の成立以降，権力は頂点というよりもむしろ，ひとつの充満状態［*pieno*］，すなわち指揮命令の均質で継ぎ目のない拡張であって，市民社会の上にあるのではなくそれを貫いているのです[17]．

ネグリが示している情勢認識は，資本―社会―国家の一体化であり，権力はかたよって存在している（偏在）のではなく，広くゆきわたっている（遍在）ことになる．権力の遍在状況は，「市場と生産回路のグローバル化に伴」って，「新たな主権の形態」すなわち〈帝国〉を出現させることになる[18]．

2　非物質的労働

ポスト・フォーティズムの時代においては，非物質的労働が労働の主導権を握る．そして非物質が資本の存続にとって生命線となり，その裏返しとして資本への抵抗にとっても重要なポイントとなる．

本章では，この非物質的労働という概念そのものについて明らかにしていく．

2.1 『イタリアのラディカル思想』における非物質的労働

ラッツァラートは，『イタリアのラディカル思想』のなかで非物質的労働を次のように定義する．

> 物質的労働とは商品の情報的で文化的なコンテンツを生産する労働として定義される．非物質的労働という概念は労働のふたつの異なる側面に関係する．一方では，「商品の情報化されたコンテンツ」にかんしては，それは工業部門および第三次産業部門における大企業のなかで働く人びとの労働過程のなかで生じている変化に直接かかわっている．そこでは直接労働に含まれるスキルは，次第にサイバネティクスとコンピューターの統制（および水平的かつ垂直的なコミュニケーション）をますます包含するようになっている．もう一方では，商品の「文化的なコンテンツ」を生産する活動にかんしては，非物質的労働は通常は労働（work）として認識されない一連の諸活動，言い換えると文化的で芸術的な標準，ファッション，好み，消費水準，そして，より戦略的であるが，世論を定義して定着させることを含む種類の諸活動を包含する．かつてはブルジョワジーとその子弟たちの特権的な領域であったのだが，これらの諸活動は1970年代の末から「大衆知性」として定義されるようになった領域になったのである．これらの戦略的な部門における重大な変化は労働力の構成やマネジメントそして規制――つまり生産の組織化――だけではなく，より深く，社会の内部での知性の役割や機能およびそれらの諸活動に根本的な変化を生じ

させた[19]．

ラッツァラートは，1970年代が開始する時点で，この非物質的労働と呼ばれるものが登場する前提が形成されたと分析している．それは先でも引用したように，「ポスト・フォーティズムのモデル」の構築と軌を一にしている．そこでは，「インターフェイス」という概念が「この種の労働者の諸活動を適切に定義する」のである．つまり，「仕事とは生産的協働を達成し維持する能力として定義されなければならない」とされる．そこで「工場の部分となるような労働者の魂（soul）」のための方策をさがすことが「近代的なマネジメントの技術」である．そうしてさらには「労働者の人格と主体性は組織化と命令に順応しやすくされなければならない」のであり，したがって「非物質性の周囲においてこそ労働の質と量が組織化される」ようになる[20]．ネグリも基本的にはこうした見解を採る[21]．

非物質的労働が生産するものとして，ラッツァラートは「オーディオヴィジュアルの生産，広告，ファッション，ソフトウェアの生産，写真，文化的諸活動など」をあげている．また「社会的コミュニケーションの過程」が論じられている[22]．このように見てみると，ここで重視されている非物質的労働の中身は知的労働であることが理解できる．これはネグリおよびハートにおいても同様である．ディビット・シャーマンによれば，「ネグリとハートがそれ（非物質的労働＝引用者による補足）について語るとき，彼らは通例最先端のコミュニケーションとインフォメーションのテクノロジーに従事する人々に言及する」[23]．ダイヤー＝ウィズフォードの評価では，ネグリと彼の共同研究者たちは「コミュニケーション･テクノロジーのネットワークとして登場した《一般知性》の世界の協同的で創造的な潜勢力を強調することで議論のなかに新しい戦線を開いた」とされる．実は，ネグリの議論は「インターネットについての直接的な議論をあまり含んでいない」が，「ネグリの理論とサイバースペースとのあいだには明確に『適合するもの』が存在する．コンピューターネットワークとは，再構築され，情報的な資本の典型的なテクノロジーとして非物質的労働にかんするネグリの議論のなかに位置づけられた」[24]のである．

このような評価は妥当であると考えられる．ネグリおよびハートが非物質的労働を観察するときに，まず想定されているのは知的なコンテンツを生産する知的に洗練された労働者であり，それを具体化してみると高度なコンピューター労働に従事する高等教育を受けた労働者ということになるであろう．このように把握すると，もはや「労働者」というよりは「クリエーター」と表現したほうが適切かもしれない．しかし，ネグリは「伝統的なマルクスの言い回しを持ち続けることによって」，「高度資本主義の命令と，その高度資本主義が依存する活動を有する社会的主体の必要と欲望とのあいだでの『決して途切れることのない敵対関係』を強調することを選ぶ」とされる．コンピューター労働による「ハイテックな生産物は価値法則を破壊し，資

本主義を脱構築するという考えはネグリの著作のなかで繰り返しあらわれ」る[25]．こうした認識によってネグリおよびハートは，非物質的労働の世界では次の事態が発生すると述べる．

> 協働，あるいは生産者のアソシエーションは，資本の組織化能力とは独立に措定される．労働者の協働や主体性は資本のもくろみの外部で接触点を見いだすのである．資本はたかだか捕獲の装置，幻影，偶像にすぎなくなる．潜在力の展開のオルタナティヴな基礎を構成するだけでなく，事実上，新たな構成的創設を表象＝代表する自己価値創出（自己価値増殖）のラディカルで自律的な諸過程が，その周囲を旋回するのだ[26]．

こうした非物質的労働についての把握の仕方については批判も多い．知識や知的労働へ偏重した議論になっているという批判である．

ダイヤー＝ウィズフォードは，ネグリたちが繰り返す「ポスト工業的プロレタリアートの至るところに非物質的労働が存在するというのは真実である」とする．しかし，この見解は「十分スキルを有し，十分に支払われるシンボリック・アナリストと，用務員，ファーストフードの店員，データの入力要員との区別を最小限にしか評価していない」と批判する[27]．また宇仁宏幸が指摘しているように，同じコンピューター労働でも，高度なスキルを要する創造的で知的な情報加工と，単なるデータ入力のような低いスキルしか求められないルーチンワークのような労働が存在する[28]．ネグリたちの議論ではこの区別が考慮されていないのである．

またシャーマンは，「ネグリとハートが高い教育をうけた『ハイテク』ワーカーズの影響が増大することを指摘するのは正しい」と判断しつつも，彼らが「こうした労働者たちが労働力の比率として増加しつづけるという主張を立証するために必要な経験的分析をしていない．もし立証したら，ネグリとハートがこうした労働者に属するとしている革命的役割を彼らの経験が証明するであろう」と否定的な評価を下している[29]．

そしてダイヤー＝ウィズフォードが指摘するように，「ネグリの仕事に対する批判が最も強いのは，ジェンダーと国際的な分業にかんすることである」[30]．これらの批判点についてネグリとハートは『〈帝国〉』以降の著作で応答することになる．

2.2 〈帝国〉三部作における非物質的労働

ダイヤー＝ウィズフォードによると，ネグリは非物質的労働を考えていくなかで，その重点を変化させてきたと述べている．特に『〈帝国〉』において生政治的な観点が導入され，その議論は複雑さを増したとされる[31]．これはグローバル化と生政治という二つの観点を導入することで，ジェンダーと国際的な分業についての批判に答えようとしたためであろう．以下，『〈帝国〉』から『コモンウェルス』に至る非物質的労働概念について検証していくことにする．

『〈帝国〉』においてネグリおよびハートは，「剰余価値の生産において，大工場の労働者たちの労働力によってそれまで占められていた中心的役割が，今日ではますます知的かつ非物質的なコミュニケーションにもとづく労働力によって担われるようになってきている」という認識を示したうえで，非物質的な労働を次の三つの側面にまとめる．「まず，情報ネットワークに新たにむすびつけられるようになった，産業的生産内のコミュニケーション労働，次に，シンボリック分析と問題解決における相互作用労働，そして最後に，情動を生産し操作することからなる労働」である．そして「これらのうち，身体的および肉体的なものの生産性に照準した三番目の側面は，生政治的生産の現代的ネットワークにおけるきわめて重要な要素である」とする．なぜなら，「諸身体の生産性と情動の価値こそが，絶対的に中心的な役割を演じている」からである[32]．

彼らによれば，これら三つの側面のうち，前の二つはコンピューターとの関係で理解できるというわけである．

> ますます拡大するコンピューターの利用は，労働における実践や関係を――じつのところ，あらゆる社会的な実践や関係とともに――徐々に定義し直してきた．（中略）たとえ直接コンピューターと触れる必要がないときでも，コンピューターの動作のモデルにそったシンボルや情報の操作は，きわめて広範囲に及んでいるのである．（中略）今日では，私たちはますますコンピューターのように考えるようになってきており，その一方，コミュニケーション・テクノロジーやその相互作用のモデルは，労働の諸活動のなかでますます中心的なものになってきている[33]．

このような非物質的労働の出現と生産の情報化がもたらしたのは，「さまざまな労働過程における均質化」であったことに，ネグリとハートは注意をうながす．

> 十九世紀のマルクスの視座からすると，多様な労働活動の具体的な諸実践は，それぞれ根本的に異質なものであった．裁縫や織布は，同じ基準では計ることができない具体的な行動を含んでいた．それらの具体的な諸実践から抽象されてはじめて，諸々の異なった労働活動が一緒にされ，もはや裁縫や織布としてではなく人間の労働力一般の支出として，つまりは抽象的労働として均質な仕方でとらえられるようになったのである．だが今日では生産のコンピューター化とともに，具体的労働の異質性は縮減され，労働者は彼あるいは彼女の労働の対象からますます離されるようになってきている．（中略）コンピューター化された生産をとおして，労働は抽象的労働の位置へと向かうことになるのである[34]．

しかしコンピューターのモデルでは，経済のサーヴィス部門，つまりサーヴィスの生産に含まれているコミュニケーション的かつ非物質的労働のすべてを説明することができないということもネグリとハートは述べている．そこで，先でも指摘したとおり「情動にかかわる労働」が重要になってくるのである．この情動労働の事例として，ケア労働や娯楽産業があげられている．こうした労働の生産物は，「安心や，幸福感や，満足や，興奮や，情熱といった感情」であり，それゆえに非物質的である．この非物質的労働の情動的側面は，「コンピューターによって定義される情報労働とコミュニケーションのモデルを大きく超えて広がっている」．情動労働は，「《女性労働》についてのフェミニズムの分析が《身体的様式における労働（labor in the bodily model）》と呼ぶものからよりよく理解できる」とされる．なぜなら「ケア労働はたしかに身体的，肉体的な領域に完全に属するものだが，にもかかわらずそれが生産する情動は非物質的なものである」からだ．情動労働はさらに社会的ネットワーク，コミュニティの諸形態，生権力を生み出すとされる[35]．

このように『〈帝国〉』では，知的かつ非物質的なコミュニケーションにもとづく労働力の優位性という分析のうえで，非物質的労働が労働の中心的位置を占めつつあるという認識を示す．そして非物質的労働は三つの側面から分析できるが，そのなかでは情動労働にもっとも重点を置いて論じている．

ネグリとハートは，非物質的労働について『マルチチュード』においてより詳細な論述，とくに情動労働について具体的な論述を行っている．

それによると，非物質的労働は現在行われている労働のなかで主導的位置を占めるものであるとされる．二〇世紀末の数十年間から続いている傾向は，やはり工場労働がさまざまな労働のなかでの主導権を喪失しているという特徴をもっている．この傾向は，むしろ転換と表現したほうが適切であろうが，「フォーティズムからポスト・フォーティズムへ」と表されている．このことは，イタリアのラディカル派では共有されている認識であり，ネグリ（およびハート）も『〈帝国〉』，『〈帝国〉をめぐる五つの講義』のなかで繰り返し表明していて，『マルチチュード』においてもこの認識に基づいた論述が行われている．

『マルチチュード』では，「非物質的労働とは，知識や情報，コミュニケーション，関係性，情緒的反応といった非物質的な生産物をつくり出す労働である」と定義される．なぜこのような概念が必要になるのか，その理由は，「サーヴィス労働や知的労働や認知労働といった従来使われてきた用語」では不十分だからである．ここでは非物質的労働を二つの形態に分けて説明している．そのひとつは「問題解決やシンボリックで分析的な作業，そして言語的表現といった，主として知的ないしは言語的労働を示す．この種の非物質的労働はアイデンティティやシンボル，コード，テクスト，言語的形象，イメージその他の生産物を生み出す」形態である[36]．もうひとつが「情動労働」であり，これは以下のように説明される．

心的現象である感情とは異なり，情動とは精神と身体の両方に等しく関連する．喜びや悲しみといった情動は，一定の思考の様態と一定の身体の状態をともに表現することで，人間という有機体全体の現在の生をあきらかにするのだ．したがって情動労働とは，安心感や幸福感，満足，興奮，情熱といった情動を生み出したり操作したりする労働を指す．具体的には，弁護士補助員やフライトアテンダント，ファーストフードの店員（笑顔でのサーヴィス）といった仕事に，情動労働を見出すことができる．少なくとも支配諸国において情動労働の重要性が増していることは，たとえば雇用者が非雇用者にたいして，教育や好ましい態度，性格，「向社会的」行動を主要なスキルとして強調し，それらを身につけるように要求する傾向に表れている．好ましい態度と社会的なスキルを身につけた労働者とは，情動労働に熟達した労働者と同義なのである[37]．

これらの形態は分離しているのではなく，混在して非物質的労働となっている．「たとえば，コミュニケーションの創造にかかわる仕事は，あきらかに言語的で知的な作業であると同時に，コミュニケートし合う当事者同士の関係は必然的に情動的要素が含まれる」．さらに，医療労働者の例を引き合いにして，非物質的労働と物質的労働との混淆についても指摘する[38]．

また，非物質的労働の主導的位置についても指摘している．「私たちが主張したいのは，今や非物質的労働が質的な意味での主導権を握るに至り，他の労働形態や社会そのものに，ある傾向を課しているということである」．この非物質的労働の主導性について，ネグリおよびハートは四つの根拠をあげている．第一にあげられるのは「もっとも具体的な証拠」である「雇用の傾向」である．これは先程も引用したのとほぼ同様の内容であるともいえる．「支配諸国では現在，統計上もっとも急速に増えている職業――たとえば飲食サーヴィスのスタッフ，販売員，コンピューターエンジニア，教師，医療従事者など――の大部分において，非物質的労働が中心的役割を占めている」．第二の根拠としては，「より質的な観点においては」，「他の労働と生産の形態が非物質的生産の特徴を採り入れている」．事例として，「種子に含まれる情報を管理する方法が農業に影響を与えている」などがあげられている．第三に，「非物質的労働によって生産される財産の非物質的形態の重要性が増加している」ことが指摘される．この事例としては，特許や著作権そしてさまざまな非物質財が引き起こす複雑な法的問題があげられる．そして最後に，「非物質的生産の典型をなす分散型ネットワーク形態が神経系統からテロリスト組織に至るすべてのものを理解する手段として，社会的生のあらゆる場面に登場していること」があげられるのである[39]．

『コモンウェルス』においては，非物質的労働よりも，非物質的生産に重点が置かれる．非物質的労働は次のように論じられる．

ネグリとハートは「世界の多くの部分で労働が被っている最近の変質」として三つの傾向を

とりあげる．ひとつ目は「資本主義的価値増殖過程において非物質的労働の優位性と普及へと向かう傾向」である．「たとえば，イメージ，情報，知識，情動，コード，そして社会関係が資本主義的価値増殖過程において物質的商品あるいは商品の物質的側面を凌駕するようになる」．ここで非物質的労働は以下のように論じられている．

> こうした非物質的財（または物質的財の非物質的側面）を生産する労働形態は，話しことばでは頭脳のそして心の労働と呼ぶことができる．この労働形態にはサーヴィス労働，情動労働，そして認知労働が含まれるが，こうした紋切り型の代喩ではこの労働形態を把握できない．（中略）かつて私たちはこれらの具体的な差異から抽出したのだが，これらのさまざまな労働形態に共通するものはそれらの生政治的性格によってもっともうまく表現される[40]．

次のふたつ目の傾向とは「労働の女性化」である．これは「三つの相互に独立した変化」が関係している，そのひとつは量的なもので，この二,三〇年間をつうじて全世界的な賃労働市場における女性の比率の急激な増加である．もうひとつは「労働日と労働の時間的《柔軟性》における質的移行」である．すなわち「多くの労働者によって獲得されていた規則的に分けられた労働日，これは八時間労働，八時間の休息，八時間の睡眠というものであるが，こうした労働日は急速に減少している．パートタイムや非正規労働者，不規則な時間，そして複数の勤め先，こうしたものは長い間世界の従属的な地域では典型的な労働であったが，今や支配諸国においてでさえ一般的になりつつある」．そして三番目の変化もやはり質にかかわることである．情動的な，そして情緒的な関係性を構築・維持するような役目は伝統的に「女性の仕事」と考えられていたが,これらが「すべての労働部門で徐々に中心的になっていく」．このため「生産労働と再生産労働のあいだの伝統的な経済的分割は破壊される」ことになる．ネグリとハートが注意を促しているのは,「女性化」ということばが「ジェンダーの平等性に起因する」わけでも「ジェンダーによる分業を破壊する」わけでもないということである．彼らは次のように指摘している．「情動労働は仕事中であろうとなかろうと不均衡に女性に課される．（中略）女性たちはいまだに世界中の国々で，田舎でも都市でもインフォーマルな部門の職の重荷に耐えながら，家事や子どもの世話のような無給の家事労働や再生産労働に第一義的に責任をもたされている」．

第三の傾向として,「労働の技術的な構成が移住の新しいパターンと社会的，人種的混合の結果である」ことがあげられる．そうしてこれもまた「労働の女性化」に関連するものとして，ネグリとハートによって論じられているのである[41]．

2.3　非物質的労働と生政治

すでに明らかであろうが，ネグリとハートは非物質的労働と生政治を連関させる．

マックス・ローゼンクランツによれば，ネグリとハートは『〈帝国〉』のなかで生政治を導入する．そして「社会の実質的包摂と非物質的労働というそれぞれの概念は，生政治という概念の中に集められる」[42]．実際，『〈帝国〉』では次のように述べられている．

> 知的労働と同じく，情動の労働の新しい力，新しい地位が，労働力を特徴づけている．知的であり身体的でもあるようなこうした生の生産的諸能力に与えられた名こそが，生権力である．いまや生産諸力は，事実上，完全に生政治的なものである．言い換えれば，生産諸力は生産のみならず再生産領域全体にまで流れ込み，生産と再生産領域の全体をも直接に構成している．生権力は，再生産にかんするすべてが資本主義の支配のもとに包摂されるとき，生産の担い手になる．生権力とは，資本のもとへ社会が実質的に包摂されることを別の言い方で示したものであり，どちらもグローバル化した生産的秩序と同義なのである．（中略）労働はますます非物質的になり，生産における息もつかせぬ特異な革新の過程をとおしてその価値を実現している．つまり労働は，社会的再生産というサーヴィスをはるかに洗練された相互的なやり方で消費し，活用する能力を高めている．知性と情動（もしくは実際には身体と同じ広がりを持つ脳）は，まさにそれらが主要な生産諸力になるそのとき，みずからが活動するその地勢を横断しながら，生産と生を一致させる．なぜなら，生とは，諸々の身体と脳からなる集合体による生産と再生産以外の何ものでもないのだから[43]．

ローゼンクランツはさらに，ネグリが「生と労働の区別がないという世界観」をもっていると指摘する．というのは，「ネグリの非物質的労働のヘゲモニーと社会の実質的包摂についての主張は同じ社会現象を把握するための二つの方法である．すなわち生権力による労働の組み替えである」[44]．その根拠としてローゼンクランツは，『〈帝国〉』の次の記述を引用する．「生はもはや労働日に従属する再生産のサイクルのなかで生産されるのではない．反対に，生はあらゆる生産に浸透しそれを支配するものである」[45]．

この認識は『マルチチュード』にも引き継がれる．ネグリとハートは，非物質的労働の曖昧さを自ら指摘しながら，次のように述べている．

> すべての非物質的労働は必ずといってよいほど，物質的な労働形態と混ざり合う．（中略）すべての非物質的生産に伴う労働は物質的なものでもあることを，ここでは強調しておかなければならない．どんな労働もそうであるように，そこには人間の身体と頭脳とがかか

わっている．非物質的なのはあくまでもその生産物なのである．この点で，非物質的労働が非常に曖昧な用語であることを私たちは認識している．むしろこの新たに主導権を握った労働形態を，「生政治的労働」として――物質的財だけではなく，さまざまな関係性や，最終的には社会的生そのものを創り出す労働として，理解したほうが適切かもしれない．このように生政治的という語は，経済的なものと政治的なもの，社会的なもの，そして文化的なものを分けてきた従来の区別がどんどん不鮮明になってきたことを示唆する[46]．

『コモンウェルス』では，さらに生政治的生産の議論が展開される．次の引用はその一例である．

生政治的生産は経済の重心を物質的な商品の生産から生産と再生産の区別を曖昧にする社会的関係の生産へと移動する．(中略)生政治的生産はすべての量的な測定を凌駕しつつ，たやすく共有され，私的財産として囲い込むことが難しい，〈共〉の形態をとる傾向にある[47]．

「社会の実質的包摂」と「非物質的労働」は「生政治」のもとで連結される．この生政治がマルチチュードを政治主体にするのである．

3　政治主体としてのマルチチュード

ポスト・フォーティズムの時代，すなわち実質的包摂の段階は今日，グローバル化されており，〈帝国〉と呼ぶべき主権的権力形態を形成している．マルチチュードとは，「〈帝国〉の内部で成長するオルタナティヴ」である．また「社会経済的な観点から見れば，マルチチュードとは〈共〉的な労働主体」である[48]．このようにマルチチュードは労働主体であると同時に政治主体でもある．

本章では，政治主体としてのマルチチュードを非物質的労働の観点を中心にして論じていく．

3.1　非物質的労働とマルチチュード

ネグリは非物質的労働と生政治を連関させた意義を次のように述べている．

実際，労働過程はすべて非物質的労働の方向へ進んでいる．ある側面では非物質的労働は，もっとも高次の表現をとる抽象化された労働である．〈帝国〉の議論は，この前提から出発しなければ不可能であったであろう．このような前提から出発してはじめて，私たちは運動と闘争にかんして発展性のない外形をもたらす従来の労働の定義を覆すことができた

のである．だから,〈帝国〉についての私たちの主要な生政治的認識は,労働の移動可能性,大がかりなプロセス,生政治の巨大な運動の展開のうえにしっかりと据えつけられている．これらの運動は，単に否定的なものではなく，また悲惨や専制からの逃避を表現しているだけでなく，富，雇用，構想（invenzione）へ向けて，非物質的労働の中心性に向けて，自由へと肯定的に自らを動かす運動なのであり，そしてこうした回路に参加する大いなる欲望を表明する運動でもある[49]．

ポスト・フォーティズムにおける労働過程を分析すると，非物質的労働が主導権をとっているという状況がある．この認識が〈帝国〉三部作の前提となっている．この前提が従来の労働の定義を刷新し,運動と闘争に発展性をもたらすことになる.「生政治の巨大な運動」である「自由へと肯定的に自らを動かす運動」は，非物質的労働の中心性へと向かう．非物質的労働を担う主体がマルチチュードである．

ポストモダンの局面におけるマルチチュードの概念は，非物質的労働を表現するマルチチュードの能力によって，そして非物質的労働を介して（つまりは活動力を介して）生産を再領有化する潜勢力によって定義される特異性の実存に結びつけられている．私たちはポストモダン的な労働力とはマルチチュードの形態のなかに生じると述べることができる[50]．

ここで「ポストモダンの局面」とされているのは「ポスト･フォーティズム」のことである．ポスト・フォーティズムすなわち実質的包摂の段階で，非物質的労働を日常的に行っている主体がマルチチュードである．

ところでここでは，非物質的労働が活動力とされている．すなわち両者の関係は「非物質的労働によって（中略）表現される知的で，コミュニケーション的，関係的，情動的な活動力の総体」とされている[51]．非物質的労働とは活動力を表現するものであり，その活動力とは複数の存在であるマルチチュードに関係性をもたらすのである．

3.2　政治主体としてのマルチチュード

非物質的労働が活動力であるのは，生政治が関係している.「私たちが生政治というとき，それは労働が賃労働だけに限定できず，人間の全般的な創造的能力を指すものとして理解すべきだということも意味する」[52]．当然，非物質的労働もこの「全般的創造能力」に含まれる．この「人間の全般的な創造能力」について，ネグリおよびハートは次のように論じる．

> 非物質的労働においては，生産はこれまで経済的とみなされてきたものの枠を越えて，文化・社会・政治に直接かかわるようになる．そしてそこでは物質的な財だけでなく，現実的な社会的関係や生の多様な形態が生産されるのだ．私たちはこうした生産を，その生産物がいかに全般的なものであり，または社会的生全体といかに直接的にかかわるものであるかを強調するために，「生政治的」生産と呼ぶことにする[53]．

この生政治がマルチチュードに重要な傾向を与えることになる．

> マルチチュードによる生政治的生産は，それが共に分かち合うものや共に生産するものを結集し，グローバル資本という〈帝国〉の権力に立ち向かおうとする傾向をもつ．やがてマルチチュードは〈共〉にもとづく生産の形象を発言させ，〈帝国〉のなかを通り抜けて反対側へと突き抜けることだろう．そして自らを自律的に表現し，自らを統治するようになるのだ[54]．

マルチチュードが「〈帝国〉の内部で成長するオルタナティヴ」である理由，そして「マルチチュードのプロジェクト」すなわち「全員による全員の統治」への見通しがここで語られている．

政治主体としてのマルチチュードは非物質的生産の観点からも考察される．ネグリおよびハートは，マルクスの『経済学批判要綱』に依拠して，「生きた労働」の二つの特性について述べる．生きた労働とは「富を剝奪された絶対的貧困」であるが，この貧困を「反対側から見たとき，マルクスは貧困を人間活動の発生源として，すなわちすべての富の一般的可能性の形象，ゆえにその源泉として認識する」と指摘する．そのうえで次のように論じている．

> この貧困と可能性という生きた労働の二重の特性によって，非物質的生産のパラダイムにおける労働の主体性はいっそう明確に規定される．労働の主体性が創出する富は奪い取られ，それが敵対性の源泉となる．それでも労働の主体性は富を生み出す能力をもち続け，それがその力となる．この敵対性と力の結合によって，革命的主体性が作りあげられるのだ[55]．

労働主体がもつ能力が敵対性と結合することで，主体は革命という政治性を帯びる．マルチチュードとは非物質的労働――生産を担うことによって，政治主体となることが明らかになる．

おわりに

結局，マルチチュードとはなにものなのだろうか．ダイヤー＝ウィズフォードによれば，ネグリが深くかかわった「アウトノミアはさまざまな周縁化された部門からにじみ出たラディカルな総合（synthesis）であった．つまり，学生，失業者および不安定労働者，フェミニストの運動，そのほかの新しい社会的主体である」．そこで「ネグリは大胆な理論的前提を思いついた．つまり資本の再構築の外部で別の闘争のサイクルが出現しているということである」．そして新しい革命的主体として「社会化された労働者」が考え出される[56]．ローゼンクランツによれば，この社会化された労働者とは「ネグリの古い用語」であり，これに対してマルチチュードは「ネグリの新しい用語」である[57]．

ネグリが自らのマルチチュード概念を練り上げる際には，当然，アウトノミアの過程が影響しているであろう．中村勝巳は一九七二～三年の段階において，「《マルチチュード革命》の基本構想もその骨格はできあがっていたといえるだろう」と指摘している．その理由として，「失業者，学生，専業主婦，年金生活者，刑務所の囚人たち，その他ありとあらゆる社会的カテゴリーが，権力への抵抗闘争の主体になった」ポスト・フォーティズムの時代においては，「マルチチュードは，俗流マルクス主義的な階級分析によって切り出されてくるような静態的な『階級』として『存在』するのではなく，絶えず社会諸集団を横断して『生成』してくるなにものかであるからだ」としている[58]．

こうしてみると，潜在的には労働主体として存在しているが，政治主体としては生成するものであるということになる．「生成する政治主体としてのマルチチュード」は，現行の代表制民主主義に収まらない．従って「マルチチュードのプロジェクト」は「絶対的民主主義」すなわち「全員による全員の統治」として展望されるのである．

注

1）　いずれもマイケル・ハートとの共著．『〈帝国〉』（2000），『マルチチュード』（2004），『コモンウェルス』（2009）の三作のこと．

2）　例えば，故江川潤本学名誉教授の指摘．

3）　中村勝巳「マルチチュードの政治思想史―政治思想史のセンス・オブ・ワンダー」『中央評論』65巻4号（通巻第286号）（2014年），72-73ページ．

4）　市田良彦「コモン／レヴォリューション　ネグリが言いたかったこと」『現代思想　特集：アントニオ・ネグリ』青土社，2008年，5月号，68-9ページ．

5）　これは非常に曖昧な把握の仕方であるが，本稿においては『イタリアのラディカル思想』Paolo & Michael（1996）に寄稿している論者を指すことにする．

6）　M. Lazzarato, “Immaterial Labor”, Paolo Virno & Michael Hardt eds., *Radical Thought In Italy :A Potential Politics*（Minneapolis, University of Minnesota Press, 1996）, pp. 133-4.

7） A.Negri, *The Politics of Subversion: A Manifesto for Twenty-First Century*（Cambridge, Polity press, Trans. By James Neweel, 1989）, p. 89 & p. 79.

8） A. Negri / M. Hardt, *Labor of Dionysus : A Critique of the State-Form*（Minneapolis, University of Minnesota, 1994）, pp. 224–5.（邦訳　ネグリ／ハート『ディオニュソスの労働：国家形態批判』（長原豊・崎山政毅・酒井隆史訳）人文書院，2008年，286ページ）．傍点は原著者によるもの．以下同じ．

9） Negri / Hardt, op. cit., p. 26.（邦訳33ページ）

10） A. Negri, *Trentatre lezioni su Lenin*（Roma, Manifestlibri,［1997］2004）, p. 52.（邦訳 ネグリ『戦略の工場―レーニンを超えるレーニン』（中村勝巳・遠藤孝・千葉伸明訳）作品社，2011年，77ページ）

11） Negri / Hardt, op. cit., pp. 247–5. 邦訳350–１ページ．

12） 中村勝巳「解説　70年代イタリアにおける後期マルクス主義の成立」，『戦略の工場―レーニンを超えるレーニン』所載，作品社，2011年，524ページ．

13） Negri, op. cit., p. 87. 邦訳129ページ．

14） 以下は，A. Negri / M. Hardt, *Empire*（Cambridge, Harvard University Press, 2000）, pp. 409–10.（邦訳　ネグリ／ハート『〈帝国〉―グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』（水島一憲・酒井隆史・浜邦彦・吉田俊実訳）以文社，2003年，507–８ページ）

15） もっとも中村が述べているように，「〈労働者の階級構成〉という概念が，こんにちの日本の労働市場や人びとの労働・生活様式を分析するにあたって，どのような発見術的な効果をもたらしうるかについては，今後の検討課題」であろう．（中村「解説　70年代イタリアにおける後期マルクス主義の成立」，526ページ）

16） Negri, *Trentatre lezioni su Lenin,* p. 53.（邦訳78ページ）

17） Negri, op. cit., p. 145.（邦訳213ページ）

18） Negri / Hardt, *Empire*, p. xi.（邦訳３ページ）

19） Lazzarato, op. cit., pp. 133–4.

20） ibid.

21） Negri / Hardt, *Commonwealth*（Cambridge, Harvard University Press, 2009）, pp. 132–3.（邦訳・上・216–７ページ）

22） Lazzarato, op. cit., p. 137 & p. 140.

23） D. Sherman,（2011）“Metapolitics now”, Pierre Lamarche, Max Rosenkrantz, and David Sherman eds., *Reading Negri : Marxism in the Age of Empire*（Chicago and La Salle, Open Court）, p. 80.

24） N. Dyer-Withford, “Cyber-Negri: General Intellect and Immaterial Labor”, Timothy S. Murphy and Abdul-Karim Mustapha eds., *The Philosophy of Antonio Negri; Resistance in Practice*（London, Pluto Press）, pp. 142–3.

25） ibid. p. 138 & p. 146.

26） Negri / Hardt, *Labor of Dionysus,* pp. 282–3.（邦訳360ページ）

27） Dyer-Witheford, op. cit., pp. 147–8.

28） 宇仁宏幸「ネグリの『非物質的労働』概念について」『現代思想『帝国』を読む』青土社，2003年，２月号，120ページ．

29） Sherman, op. cit., p. 81.

30） Dyer-Witheford, op. cit., pp. 147–8.

31） ibid., pp. 136–162.

32） Negri / Hardt, *Empire*, pp. 29–30.（邦訳48–９ページ）

33） ibid., pp. 290–1.（邦訳375ページ）

34）　ibid., p. 292.（邦訳376–7ページ）
35）　ibid., pp. 292–3.（邦訳377–8ページ）
36）　Negri / Hardt, *Multitude*, p. 108.（邦訳・上・184–5ページ）
37）　ibid., p. 108.（邦訳・上・185ページ）
38）　ibid., pp. 108–9.（邦訳・上・185–6ページ）
39）　ibid., p. 109 & pp. 114–5.（邦訳・上・186ページおよび194–5ページ）
40）　Negri / Hardt, *Commonwealth*, p. 132.（邦訳・上・216–7ページ）
41）　ibid., pp. 133–4.（邦訳・上・218–220ページ）
42）　M. Rosenkrantz, “Empire, Imperialism, and Value: Negri on Capitalist Sovereignty”, Pierre Lamarche, Max Rosenkrantz, and David Sherman eds., *Reading Negri: Marxism in the Age of Empire*（Chicago and La Salle, Open Court, 2011）, p. 162.
43）　Negri / Hardt, *Empire*, pp. 364–5.（邦訳456–7ページ）
44）　Rosenkrantz, op. cit., p. 162.
45）　Negri / Hardt, *Empire*, p. 365.（邦訳457ページ）
46）　Negri / Hardt, *Multitude*, p. 109.（邦訳・上・186ページ）
47）　Negri / Hardt, *Commonwealth*, pp. 135–6.（邦訳・上・221–2ページ）
48）　Negri / Hardt, *Multitude*, p. xiii & p. 101.（邦訳・上・18–9ページおよび174ページ）
49）　A. Negri, *Guide : Cinque lezioni su Impero e dint*orni（Raffaello, Cortina Editore, Milano, 2003）, pp. 84–5.（邦訳　ネグリ『〈帝国〉をめぐる五つの講義』（小原耕一・吉澤明訳）青土社，2004年，114–5ページ）
50）　ibid., pp. 113–4.（邦訳149ページ）
51）　ibid., p. 69.（邦訳97ページ）
52）　Negri / Hardt, *Multitude*, p. 105.（邦訳・上・180ページ）
53）　ibid., p. 94.（邦訳・上・166ページ）
54）　ibid., p. 101.（邦訳・上・174ページ）
55）　ibid., pp. 152–3.（邦訳・上・251–2ページ）
56）　Dyer-Witheford, op. cit., pp. 137–8.
57）　Rosenkrantz, op. cit., p. 160.
58）　中村，「解説　70年代イタリアにおける後期マルクス主義の成立」，532–3ページ．